BUNKA FASHION COLLEGE

SUMIRE KAI

文化服装学院 すみれ会（同窓会）会報誌









NEWSLETTER OF SUMIRE-KAI

2022

NO 62

2021年度 文化祭Ⅰ部ファッションショー
「HAKU」より

BUNKA FASHION COLLEGE
SUMIRE KAI
文化服装学院 すみれ会（同窓会） すみれ会報

2022
NO 62

CONTENTS

01 すみれ会会長あいさつ

02 すみれ会名誉会長インタビュー

04 卒業生の活躍

09 すみれ会の活動

10 すみれ会奨学生の現在

14 文化服装学院の今
－Shows, Events
－Contests

18 インフォメーション
会計報告／会員手続きについて／すみれ会会員特典／
創立100周年記念事業のお知らせ／
文化服装学院 教員採用情報／古本基金

MASAKI SATO

すみれ会会長あいさつ

Message

100年という節目を目前にこれまでの
ファッションを振り返り、さらなる発展のきっかけに

記録的な暑さが続いた夏も過ぎ去り、空が澄みすがすがしい秋の風を感じる頃となりました。コロナウイルス感染症発生から3年近くがたちますがいまだ収束の兆しが見えない今日に、皆さまも心労が絶えないことと思います。事態がどのような方向に向かうのかを言い当てることはできませんが、いずれにしても特異な時代と向き合いながら、私たちは置かれた状況の中で最善を尽くすべきことには変わりはないものであります。

そのような中、2023年に文化服装学院は創立100周年を迎えます。日本に洋装の文化が入り、その後の服飾教育の中核をなしてきたといえる文化服装学院が創設され、人々が服を作り、着用するようになっておよそ100年たつということです。私たちは100年の間、ヨーロッパを追いかけて服をつくっていた時代を経て、ヨーロッパにはない日本独自のファッションと文化を築き上げてきたのです。さらにそこからファッションビジネスはどんどん進化と変化を繰り返し、昔は高価だった洋服も今や安価で購入でき使い捨てをするような時代へと変わり、洋服に求められるものは年々大きく変化してきています。

昨今では世界全体の課題としてSDGsが推進され、消費者はサステナブルを意識し、ものを大切に長く使用する人が増えています。つまりアパレルの大量生産、大量廃棄が問題になっている中でも、長く大切に着てもらえるような服づくりについて、原料からテキスタイル、染色、縫製、デザイン、パターンなど、数多くの工程をトータルで見直す時代になってきたのではないかと思います。日本のファッションの歴史をつくったと言っても過言ではない文化服装学院で、私たちが学んだ洋服づくりの基礎の勉強の大切さや先人たちが残してくれたこの100年の歴史を次の時代へ引継ぎ、すみれ会会員の皆さまと共に新しいファッションやライフスタイルに合わせた進化、考え方に発展させていきたいと考えております。

2022年（第40回）毎日ファッション大賞において、佐藤繊維（株）をはじめとする計6社が連携した「デニム de ミライ〜Denim Project〜」が話題賞を受賞しました。約20トンもの＜リーバイス®501®＞をクリエーターやアーティストらに委ねてアップサイクルした200型以上のアイテムを販売。ファッションの楽しさを発信しつつ、未来へ繋げていくための活動が評価されました。



佐藤 正樹 氏
すみれ会会長
佐藤繊維株式会社
代表取締役

すみれ会名誉会長インタビュー

Interview

世界保健機関（WHO）が、新型コロナウイルス感染症について「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」と宣言されてから、3年近く。現在、コロナ以前の生活に100パーセント戻ったわけではありませんが、感染対策を講じながら、いかに社会活動を続けていくかへと意識が変わってきました。

文化服装学院においても、3年ぶりに対面で開催された入学式から2022年度をスタートし、来年の創立100周年へ向かっています。100年を一つの通過点とし、文化服装学院が担う服飾教育における使命について、相原幸子学院長に伺いました。

――日本の服飾教育を担ってきた文化服装学院の100年を総括していただけますか。

並木伊三郎先生と遠藤政次郎先生が尽力し、まだまだ着物が主流だった大正時代に、「これからは洋服の時代が来る」という先見の明を持って始まった洋裁学校が、日本初の服装教育の学校として「文化裁縫女学校」として認可されたのが1923年のことです。

これを黎明期とすれば、その後1950年代中頃までをファッションを通じて海外との接点を築いた時代といえるでしょう。クリスチャン・ディオール氏やピエール・カルダン氏を招聘してのファッションショー開催は、当時大きなニュースになったと聞いています。1957年には開校以来初めて男子学生（23名）が師範科に進み、洋裁は女性のものという認識を変えることになりました。後に"花の9期生"と呼ばれる皆さんが学院で学び、その才能の片鱗を見せ始めた1960年代。1970年代は、卒業生である髙田賢三さんが世界中でKENZO旋風を巻き起こした時代といえば十分な説明になると思います。同じく卒業生である山本耀司さんが"黒の衝撃"と呼ばれ、日本のクリエーションが世界のファッション界を席巻した1980年代。1990年代になると、ファッションがよりリアルな様相を呈しはじめ、裏原ブーム、ストリートファッションが注目されました。高橋 盾さん、NIGO®さんもこの時期から活躍しています。

経済動向にも大きく左右されるファッションは、近年ではユニクロに代表されるようなシンプルで、低価格な上に品質もしっかりしている服が、多くの人に選ばれています。こうした企業においても、本学の卒業生が作る側、流通・販売側の多岐にわたって活躍していることを付け加えたいと思います。

会員の皆さまの活躍が、ファッションの流れを作っていることがおわかりになることでしょう。これが文化服装学院の100年であり、日本のファッションの歴史といえます。

――100年の間には、昭和の時代だけでも戦争や震災、経済成長からのバブル崩壊、その後の停滞など、あらゆる変化が訪れました。文化服装学院はその変化をどのように捉え、人材育成に努めてきたのでしょう？

私なりに文化服装学院の歴史を振り返ってみて、昭和55年度（1980年）の学科編成が大きなターニングポイントであったと思います。当時の大沼 淳理事長の下、学科編成の目的は「洋服を作る」から「ファッション商品を作る」となり、「アパレル産業を支える人材養成の場」からさらに、「ファッションの生産から、商品の流通、広告部分までの専門家養成の場」に。従来の服飾専門課程に加えて、ファッション工科専門課程、ファッション

SACHIKO AIHARA

文化服装学院の100年は、日本のファッション史。
その自負を胸に、新たなる飛躍へ向けて

流通専門課程が設けられたことで（ファッション工芸専門課程は1983年設置）、ファッション界が求めるあらゆる職種に対応する人材育成を行えるようになりました。

その後も時代の変化に合わせた科を新設するなど、ファッションの動向に細心の注意を払っています。2024年度からは、「バーチャルファッションコース」（仮称）の新設のため、現在準備を進めているところです。企業においてパターンは手引きからCADへ、現在では3Dソフトを駆使したものづくりに置き変わりつつあります。学生にはそのスキルを身につけ、即戦力として社会に羽ばたいていってほしいと願っています。

――文化服装学院の教育の根幹でもある"服づくりの基礎・技術力"は、世界に負けないものと考えています。それを踏まえた上で、今後のファッション界で求められる人材に欠かせないこととは何だとお考えですか？

専門学校には専門の分野を教えるという前提がありますが、その専門性に加えて幅広い知識、対応力、世の中をとらえる力が備わっている人材を育成していくべきだと考えています。そのため教えられることを待つのではなく、学生一人ひとりが自ら学び、探求していけるための助言、サポートを教員はすべきでしょう。学生の人間力を養うためには教員自身も体と心をクールダウンさせる時間、または好きなことに没頭する時間が必要です。しっかりとマインドセットを変えて行動できるよう、働き方改革も進めています。

――最後になりますが、すみれ会員の皆さまへメッセージをお願いします。

昨年KENZOのアーティスティックディレクターに卒業生のNIGO®さんが就任されたことは、文化服装学院としてもとてもうれしいニュースでした。そのNIGO®さんが後輩のためにと、文化学園服飾博物館でご自身のヴィンテージコレクションを展示してくださっています（詳細は8ページへ）。文化服装学院の卒業生の活躍を、私たちも可能な限り応援したいと思っておりますので、ぜひ会員の皆さまも足をお運びください。

創立100周年は文化学園にとって大きな節目となります。すみれ会会員の皆さまに向けたファッションショーと同窓会パーティを2023年6月24日（土）に予定しております。このほかにも若手の卒業生ブランドの展示、各科展示も行います。会員の皆さまと共にお祝いしたいと考えておりますので、ご予定いただければと思います（詳細は20ページへ）。

在校生はもちろん、延べ30万人という卒業生は"人とのつながり"という文化服装学院にとっての財産です。会員の皆さまのお力添えがさらなる100年への原動力になると考えています。引き続き文化服装学院へのご支援、激励を賜りたく、重ねてお願い申し上げます。



相原 幸子 先生
すみれ会名誉会長
文化服装学院学院長

卒業生の活躍

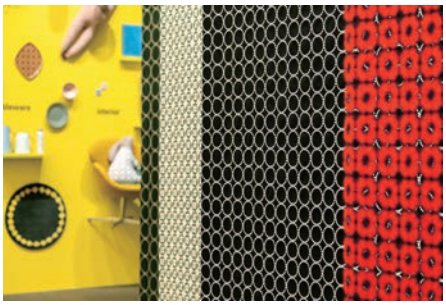
Alumni Success

新型コロナウイルス感染症の多方面にわたる影響が続く現在においても、多くの卒業生の活躍のニュースが届きました。それは同窓生として誇らしく、生活に張りを持たせてくれたに違いありません。ここではその一部をご紹介いたします。

minä perhonen
皆川 明

HP https://www.mina-perhonen.jp
Instagram @mina_perhonen.jp







Photograph: Manami Takahashi

物語のあるテキスタイルから広がる世界。
展覧会「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」

2019年、東京都現代美術館からスタートした展覧会「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」が兵庫県立美術館での開催を経て、今年福岡市美術館と青森県立美術館に巡回されました。

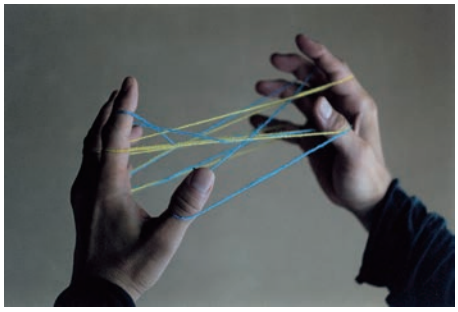
デザイナーの皆川 明さんがミナ ペルホネンの前身となる「ミナ」を立ち上げたのは1995年。「せめて100年つづくブランドに」という思いでファッションからスタートした活動はライフスタイル全般をカバーするようになり、いっときのトレンドとして消費される"ファッションの宿命"から離れたミナ ペルホネンは、ファンを増やし続けています。

この会報誌に、皆川さんがコメントを寄せてくださいました。

「ものづくりの継続性や工程の中に見られる人の労働のリレー、そして着る人、使う人による暮らしの中での継続的な利用による循環への思想を展覧会タイトル『つづく』に込めました。デザインが単に物質的、機能的な価値にとどまらず、人の営みによる精神的な幸福感に本質的な意味があるという理念に触れていただければ幸いです」

テキスタイル、服、インテリア、印刷物、またテキスタイルのために描かれた原画、展覧会のために撮り下ろされた映像、皆川さんが個人的に手がけた挿画や作品などはファンならずとも、また年齢も関係なく楽しめるものとなっていました。

この会報誌が皆さまのお手元に届く頃には、ちょうど会期終了を迎えているのが残念ですが、トークショーの模様などが特設サイトにアップされているので、皆川さんが同展に込めた思いをうかがい知ることができます。ミナ ペルホネンが大切にしているものづくりへの思いを感じてください。



Photograph: Yoshihiko Ueda

「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」展特設サイト

JUNKO KOSHINO
コシノジュンコ

HP http://junkokoshino.com





常にモードの先端を走りつつ、新たな創造を繰り広げる。「原点から現点」展を開催

今年4月15日（金）～5月29日（日）、大分県立美術館にて「コシノジュンコ 原点から現点」が開催されました。

代表作である赤と黒を基調とした「対極」シリーズ、琳派や能と共演した作品のほか、高校時代に描いた絵画、最年少の19歳で装苑賞を受賞した作品、世界各地で開催したファッションショーの映像や写真の数々など、約230点にものぼる作品・資料が展示されました。それらはファッションを軸に、スポーツチームのユニフォーム、オペラの舞台衣装、インテリア、また花火のデザインなどジャンルを超えた表現を切り拓いた先駆者であることの証し。会期中には、2012年からステージ衣装を手がける和太鼓パフォーマンスグループDRUM TAOも披露され、躍動する音楽と衣装で会場を沸かせました。

「先入観は持たない。相手に共感し、一緒に楽しむ」ことで新しいものを創りだすというコシノジュンコさんは、未来に向けてチャレンジを続けます。

SAQULAI.Inc
櫻井 利彦

HP https://www.saqulai.com
Instagram @saqulai.inc


撮影：上原タカシ


撮影：阿部章仁

劇団四季ミュージカル『バケモノの子』より。キャストの激しい動きに合わせ、驚くほど伸びるという特殊なストレッチファーを使用。原作アニメの体形に近づけるために、着肉も独自に制作。

衣装デザイナーとして、「人がそこにいるという、立体感と存在感を伝えたい」

舞台やコンサートなど、観客としてはキャストやミュージシャンが目当てという場合が多いでしょう。けれどそうした方々が最大限のパフォーマンスを発揮し、魅力的に映るための裏方がたくさんいます。世界観の最終的な作り込みという点で、衣装はキャストと一心同体。そうした服づくりができる衣装デザイナーとして、大活躍をしているのが櫻井利彦さんです。

1991年にアパレルデザイン科を卒業。こつこつとドレスを作っていく中で、ミュージシャンのMISIAさんが『Everything』という楽曲のミュージックビデオの中で櫻井さんのドレスを着用し、その後ツアー衣装の制作も手がけたことが舞台衣装の世界に入ったきっかけだそうです。

「学生時代の一番の思い出は2年生の時に見せていただいた笠井フジノ先生の立体裁断と、小池千枝先生の石の授業です。布で立体を包む、布が立体になってゆく……生成りのシーチングで組んだ仮縫いは光と影で、人体の奥行きが感じられるもの。人がそこにいるという、立体感と存在感を伝えられたら、という思いが、衣装制作の根底にある、一番の動機なんだと思います」

今年10月以降も、劇団四季の舞台、PerfumeやYUKIさんといったミュージシャンのツアーで櫻井さんの衣装が見られるとのこと。お出かけになる方は、ぜひ注目してください。



東京オリンピック2020の開会式で話題となったピクトグラムのパフォーマンス衣装も櫻井さんが制作。特に球体の頭部分は視野の確保、呼吸も問題なくでき、軽量という日本の新素材を使用したもの。picture alliance/アフロ

myriam swim
荒井 美穂

HP https://myriam-swim.com
Instagram @myriam_swim/
E-mail info@myriam-swim.com

Everybodyではなく、Every Bodyのために。
オーストラリアでスイムウェアブランド設立

荒井美穂さんはアパレルデザイン科を卒業後、東京と大阪でインナー・ランジュエリーウェアのデザイナーとして約7年間勤務。ニューヨーク留学を経て、オーストラリアに移住後、2019年にミリアム スイムを立ち上げました。

「インポートランジェリーが好きで、学外でも女性用下着のパターンを学んでいたほどランジュエリーひと筋。いつかは独立したいと考えていましたが、海外に出かけるようになると、ランジェリーは欲しいものが見つかるけれど、水着はしっくりくるものがないことに気づきました。オーストラリアでは老若男女、年齢や体形に関係なく、スイムウェアを着てビーチライフを楽しんでいる姿がとても印象的で、日本でもそんなボディポジティブの大切さを伝えられたらと、スイムウェアブランドをスタートさせました。

ブランドコンセプトは、"Sustainable Swimwear for Every Body"です。Everybodyではなく、Every Body。すべての商品にECONYL等のリサイクル素材を使用していること、また継続的なデザイン展開やリペアサービスなどで最小限の消費活動で楽しめるような運営も特徴です」

来夏からの本格的な日本展開を視野に入れ、今年7月〜8月にかけて伊勢丹新宿店にてポップアップショップも開催。XSからXLまでのサイズ展開に加え、今後はベビー、キッズ向けのアイテムも取りそろえる予定だとか。世代、体形の差も個性として、おしゃれを楽しんでほしいというポジティブな思いが多くの共感を呼びそうです。





HauteCouture Vogue、Vogue Ruby
青山 定慈、青山 明里



雰囲気たっぷりの螺旋階段が目印のアトリエ部分。





カフェで人気のスイーツ、レモンクリームパイ。

丁寧な服づくりと味を
3代目、3兄弟で

「祖父母がボーグ洋裁店を創業し、パリ留学中に出会った父と母（文化服装学院卒業）が2代目に。私が三代目となります」とおっしゃるのは、アパレルデザイン科を卒業後、KEITA MARUYAMAで修業を積み、家業であるオートクチュール ボーグを継いだ青山定慈さん。飲食部門となるボーグルビーは2010年からで、同部門代表兼シェフの長兄に加え、スイーツ担当の明里さんの3兄弟で切り盛りしています。実は明里さんもニットデザイン科の卒業生。ニット専門のアトリエに勤務後、ル・コルドン・ブルーにて製菓を学んだというキャリアを今の仕事に生かしています。

老舗然としているわけではなくとも、ヨーロッパから直接買いつけた生地やボタンなどが所狭しと並ぶ店内は独特の雰囲気が漂い、「それまでアトリエに入りづらかったという方も、食事をきっかけに服を手に取っていただいたり、アトリエとカフェのいい相乗効果が続いています」とのこと。

「熱心な先生に徹底的に基礎をたたき込んでもらったおかげで、いまだに服づくりが楽しいです！」と話してくださったのは、お客さまのための特別な一着を誂える機会が減ったコロナ禍ですが、そんな中でも対面で仕立てるということの重要さにあらためて気づいたという定慈さん。「あまりまじめな生徒ではなかったけれど、課題をやりきる気力と体力を養われました。一番の思い出は、疲れすぎて、くだらないことでも笑いが止まらなかった友人との時間かな（笑）」という明里さん。

丁寧に作られた服に触れ、おいしいケーキをいただきながら、「私の時代はこうだったわ」なんて、文化服装学院の思い出話で盛り上がれそうな空間です。

東京都新宿区若松町28-6
TEL：03-6457-6224

速報！

matohuドキュメンタリー映画
『うつろいの時をまとう』2023春公開予定！

matohu（まとふ）のデザイナー堀畑裕之さん、そして関口真希子さん（共にアパレルデザイン科卒業）のクリエーションを追いかけた映画『うつろいの時をまとう』（三宅 流監督、グループ現代製作・配給）が来年春公開予定です。2020年1月に開催された「matohu 日本の眼展」を基点として語り始められる日本の美、ものづくりへのこだわりに焦点を当てた作品で、その映像美ともあいまって、matohuというブランドへの憧憬がかき立てられるはず。今後、できるだけたくさんの方に鑑賞していただくことを目的とした宣伝活動のためのクラウドファンディングも実施予定。映画に関する詳細については、すみれ会ウェブサイトでも随時お知らせいたします。

ROARS ORIGINAL
高橋 生児



HP https://www.roars.jp
Instagram @ROARS_ORIGINAL_TOKYO/

バイカーとしての経験を生かし、モーターサイクル・ファッション・アートの融合を目指す

2003年にメンズブランド「ROARS」を立ち上げ、2007年に「ロアーズオリジナル」ショップを東京・南青山にオープン。現在は西麻布に拠点を移した高橋生児さんが、文化服装学院で学び始めたのはすでにブランドをスタートさせた後のことです。

「独学のまま、25歳でブランドを始めてから、服飾専門学校を卒業した人に勝手にコンプレックスを抱くようになっていて（笑）、３０歳の時にⅡ部服装科に。おかげで独学だったパターンも基礎から習得でき、友達もできて、すっかりコンプレックスは消えました！」

高橋さんが作るのはモーターサイクルアパレル。実はバイクの技術職の経験もあるが、アパレルのほうがより幅広い可能性があると感じてのことだそう。

「ライダースジャケットはおしゃれアイテムといっても、バイカーは機能服として着用します。転んでも、どんな革なら丈夫なのか、そのためにはどれくらいの厚みが必要なのか。バイカーとして、また技術職としての経験値は、今の服づくりに役立っています」

バイカーでなくとも欲しくなるようなアイテムがそろうロアーズオリジナルでは「現在、スタッフ募集中」。「ご興味のある方はぜひご連絡ください！」とのことです。

5-knot
鬼澤 瑛菜、西野 岳人

心地よく暮らすことから生まれる服

アパレルデザイン科2年次の同級生という鬼澤瑛菜さんと西野岳人さんが5-knot design.を設立したのが2012年のこと。翌年オリジナルブランド「ファイブノット」をスタートし、10年という節目を迎えました。

「5-knot以外でも、デザインやブランドディレクションといった仕事を引き受けていたので（現在も進行中）、設立当時はとにかく無我夢中でした。ただどういった選択がベストなのかを迷いながらも決断し、実行してきたことで視野が広がったと思います。当初から"旅とヴィンテージ"をコンセプトに、二人が実際に旅した国や地域をテーマとしたコレクションを作り続けていますが、それは今でも変わりません。二人の暮らしも"旅"と"ヴィンテージ（古いもの、その価値を見いだすこと）"が中心です。周りの環境は大きく変わりましたが、自分たちの生活や思想とブランドの方向性、そして人々が暮らしに求めるものが近くなったように感じています」

じっくりと時間をかけて開発されたオリジナルの糸や素材の使用、ロスを減らすための受注生産、リアルクローズであること。今年10月以降、そんな"旅の空気を纏う服"に触れられる展示会や地方でのイベントも予定されています。日程や詳細はインスタグラムにて告知されるので、ぜひご覧ください。





HP https://5knot.thebase.in
Instagram @5_knot
E-mail info@5-knotdesign.com

岩本 幸一郎

流れていく情報の中、目を留めて鑑賞したいと思えるような作品に

ファッションにトレンドがあるように、写真の世界にもトレンドがあります。アーティスト個人が迎合しているわけでもないでしょうが、「そういう写真をよく見る」というように。そんな中にあって、現在注目を集める若手写真家の岩本幸一郎さんは「独創的であること」が自身の写真の魅力であるといいます。

「クライアントワークでもパーソナルワークでも、"美しくあること"を大切にしています。それが大前提の上で、さらに全ての作品に共通するのはモチーフや作業一つ一つに意味を持たせること。情報過多といわれる時代でも、そうした作品であれば必ず目を留めて、鑑賞したいと思ってもらえると考えています」

20歳まで将来の夢や目標がなく、本当になんとなくⅡ部服装科に入ったという岩本さんが、学院で学んだことで今も大切にしている教えが「一つでもいい、何でもいい。志を高く、強く持つこと」だそうです。「昼は仕事、夜は授業という日々を両立させることが大前提の学生時代。芯の通ったものの重要性は、この頃に体得したのだと思います」



パーソナルワーク「isolation」より。

文化祭Ⅱ部ファッションショーの委員長も務め、「TOKYO SUBURBIA」というショー（2015年）を共に作り上げた仲間とは今も連絡を取り合っているといいます。なんとなくから一生物を見つけた学院時代。今では後輩のためにと、ファッションと写真について、またポートフォリオ作成のための特別講義にも登壇してくださっています。

HP http://kikiinc.co.jp/index.php/works/koichiroiwamoto/
Instagram @iwamoto_koichiro

お知らせ

すみれ会報誌は年に1回発行しております。新ブランド始動、ショップオープン、展覧会開催情報ほか、会員の皆さまの活動状況をお知らせください。次号のコンテンツ、またすみれ会ウェブサイトの充実を図るため、参考にさせていただきます。

文化服装学院すみれ会事務局　〒151-8522 東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL:03-3299-2073 sumirekai@bunka.ac.jp











NIGO®（KENZOアーティスティックディレクター、HUMAN MADEデザイナー）

2022年（第40回）毎日ファッション大賞受賞！

自身に続く、クリエーター輩出のために 秘蔵のヴィンテージコレクションを文化学園服飾博物館で展示中

ここ数年のデザイナー起用やコラボレーションからも明白なように、ストリートカルチャーがハイブランドの動向にさまざまな影響を与えています。そうした中にあって、2021年9月に発表されたLVMHグループ傘下のKENZOアーティスティックディレクターへのNIGO®さんの就任は、日本のファッション界においても大きな話題を集めました。

髙田賢三さんがKENZOブランドを離れて以降、何名ものデザイナーが歴任してきましたが、NIGO®さんが手がけたデビューコレクションほど注目され、評価されたKENZOコレクションはありません。NIGO®さんは同ブランドのアーティスティックディレクター就任の際、こんなコメントを発表しています。

「私は髙田賢三さんがパリで最初のショップ*をオープンした年に生まれ、同じ学校を卒業しました。1993年にKENZOがLVMHグループに加わった年に私はファッションのキャリアをスタートさせました。賢三さんがオリジナリティを創造するアプローチの仕方は多様な文化の理解に基づいています。それは私のクリエーション哲学の本質でもあります」

ここで触れられているオリジナリティを創造するアプローチの仕方として、NIGO®さんのクリエーションの源の一つが、約35年にわたって収集してきたというヴィンテージアイテムの数々です。デザイナーにとって最もプライベートで、大切な部分でありながら、NIGO®さんは「母校の文化服装学院からさらに多くの、世界を魅了するファッションデザイナーが誕生することを願って」、貴重な数百点ものヴィンテージコレクションを現在文化学園服飾博物館で展示してくださっています。

年間を通じてファッションという文化活動の中で最も優れた成果を挙げた人（デザイナー、経営者、コーディネーター等）、企業、団体に与えられる毎日ファッション大賞（毎日新聞社主催、経済産業省後援）の2022年（第40回）の大賞をNIGO®さんが受賞されたという一報が届いたのは、今年８月末のこと。世界のファッション界を牽引するクリエーターの一人となったNIGO®さんの活躍の秘密を、「THE FUTURE IS IN THE PAST ー未来は過去にあるー NIGO's VINTAGE ARCHIVE展」にてぜひご覧ください。

* ジャングル・ジャップ



「THE FUTURE IS IN THE PAST ー未来は過去にあるー NIGO's VINTAGE ARCHIVE展」

●会期：開催中～11月13日（日）●休館日：月曜日（9月19日、10月10日は開館）●開館時間：10時～18時（金曜は20時まで。入館は閉館の30分前まで）●入館料：一般500円、大学・専門学校生・高校生300円、小・中学生200円　※すみれ会員の方は会員証のご提示により無料でご覧いただけます。

〒151-8529 東京都渋谷区代々木3-22-7
新宿文化クイントビル
TEL:03-3299-2387

文化学園服飾博物館

NIGO®さんによるKENZOファーストコレクションについては装苑オンラインで！

すみれ会の活動

Sumire's Activities

すみれ会関連イベントのご案内

3年ぶりに開催される対面での文化祭に合わせ、すみれサロン（休憩所、飲食不可）を11月3日（木・祝）から5日（土）の10時〜17時半（5日は15時まで）、すみれ市（提供布販売）を11月3日〜4日（金）の9時半から16時に行いますのでぜひお出かけください。このほかの文化祭の各種イベントや日程は文化服装学院公式サイトにてご確認いただけます。

なお100周年記念事業の一環として、2023年6月24日（土）に、ファッションショー・同窓会パーティを開催予定です。詳細が決まりましたら、すみれ会ウェブサイト等でご案内させていただきます。

※文化祭ファッションショーは事前予約制となります。予約の方法は、文化服装学院公式サイトにてご案内いたします。

すみれ会奨学金



「文化服装学院すみれ会奨学金制度」は、将来のファッション業界で活躍が期待される準会員の支援を目的とし、2016年度（平成28年度）より施行しております。会員の皆さまからのご寄付も一部活用させていただいている同制度。2022年度においても成績優秀な在学生5名が選抜され、日々の学業に生かされていることをご報告いたします。また、3年ぶりに開催された入学式に合わせ、壇上においての授与式を執り行いました。その晴れやかな姿は、新入生の目にもしっかりと焼きついたはずです。

[2022年度すみれ会奨学金受給者]

ファッション工科専門課程 ファッション高度専門士科4年
大川 遥菜さん
ファッション工科専門課程 ファッション高度専門士科4年
佐藤 果南さん
ファッション工科専門課程 ファッション高度専門士科4年
安藤 有沙さん
ファッション流通専門課程 ファッション流通高度専門士科3年
湯浅 琴音さん
ファッション流通専門課程 ファッション流通高度専門士科3年
三浦 萌絵さん

寄付のお願い

すみれ会は会費のみで運営しています。円滑な運営が図れますよう、また将来のファッション界を担う準会員の支援のため、会員の皆さまにはすみれ会の活動をご理解いただき、寄付金をお願いいたしたく存じます。

■寄付金の募集要項

[寄付金の使途]
学業優秀で今後の活躍が期待される在校生へ、授業料の一部を給付

[寄付金対象者]
すみれ会員、法人・企業

[寄付金の額]
1口1000円より3口以上
なお、金額の多寡にかかわらず、ありがたく承ります。※控除対象外

[募金期間]
募金期間は定めておりません。継続的に募金活動を行っております。

[申込み方法]
郵便振替にてお振込みください。
■振込先：ゆうちょ銀行振替口座
■口座記号番号：00150-7-766997
■口座名称（漢字）：すみれ会寄付金口
■口座名称（カナ）：スミレカイキフキングチ

※ゆうちょ銀行以外から振り込まれる場合は下記となります。
■ゆうちょ銀行019（ゼロイチキュウ）支店
■当座預金 口座番号0766997

すみれ会ウェブサイト ▼
文化服装学院公式サイト ▼

[お問合せ先]
文化服装学院すみれ会
TEL：03-3299-2073
https://sumirekai.bunka-fc.ac.jp

すみれ会奨学生の現在

Scholarship Students NOW

本年度も優秀な在学生5名へすみれ会奨学金を授与したことは先（9ページ）にご紹介したとおりですが、2016年の創設以降、これまで奨学制度を受けた卒業生は現在どのような活躍を見せているのでしょう。5名の方に当時のこと、今のお仕事についてお話を伺いました。

新井田 彩さん

（2017年ファッション高度専門士科卒業）

“卒業制作に専念できるきっかけに。それは今の自分を支える自信になっています”

ファッション高度専門士科を卒業後、レディスブランドのデザイナーとして、またOEMのデザイナーとしてアパレルに携わること5年。ECやSNSの重要性が増しているにもかかわらず、当時の職場ではその動きを捉えられていないと感じていたそうです。ならば自らその部分を補える立場になりたいと思い立ち、心機一転。現在では仕事の半分ほどがWebデザイン（ホームページの作成、ロゴデザインや広告の制作など）やシステム開発といったIT関連だという新井田 彩さん。業務委託（フリーランス）という形態で、5、6社のニットアパレルのOEM（デザイン提案や仕様書作成など）とレディスブランドのSNS代行といったアパレル関連の仕事にも引き続き携わっているとのことで、文化服装学院での学びがあらゆる方面で役に立っていることがうかがえます。

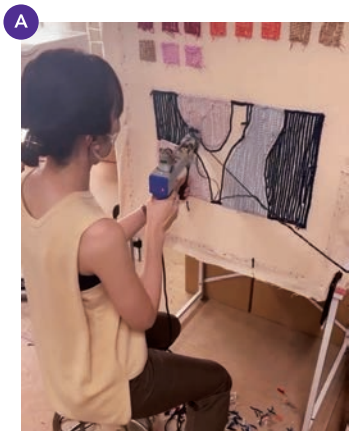
「忍耐力や失敗した時の対応など、精神面での成長も学生時代に育まれたものだと思います」

新井田さんがすみれ会奨学金を受給されたのは、奨学金創設初年度である2016年。ファッション高度専門士科3年生から４年生へ進級する時のことです。

「正直、経済的にとても厳しかったので……奨学金をいただけていなければ無事に卒業できていなかったかもしれません。4年生になると1年をかけて卒業制作であるプライベートコレクション（通称マイコレ）に取りかかりますが、この制作に専念でき、当時の作品やショーでの体験が、今でも自分の自信になっているんです」



タフティングスタジオMOKO
https://madeinmoko.com
Instagram @madeinmoko


A


B




D


C


E

A. タフティングスタジオで作業中の新井田さん。ちなみにタフティングとは毛糸を束ねた房を、タフティングガンと呼ばれる専用の機械で布に縫いこみ、カーペットやラグを作る織物技法のこと。
B. 文化祭では照明パートを担当。この日のスタッフドレスコードはウォーリー？ まさに新井田さんを探せ状態ですが、これも楽しい思い出の一つ。
C. 学生時代には海外のコンテストにも挑戦。中国やイタリア、デンマークのショーにも招待を受けて参加した。コンテスト応募の際に提出したポートフォリオとあわせて。
D. 専念できたというマイコレのテーマは「IKASAMA」。写真の加工や合成が当たり前のものとなった現代において、偽物だからこその美しさを疑似プリントや素材使い、ディテールで表現した。
E. 卒業式後の謝恩会にて。ファッション高度専門士科で４年間過ごした仲間と先生方との思い出の一枚。

シャー ナディアザホールさん
(2017年ファッション高度専門士科卒業)

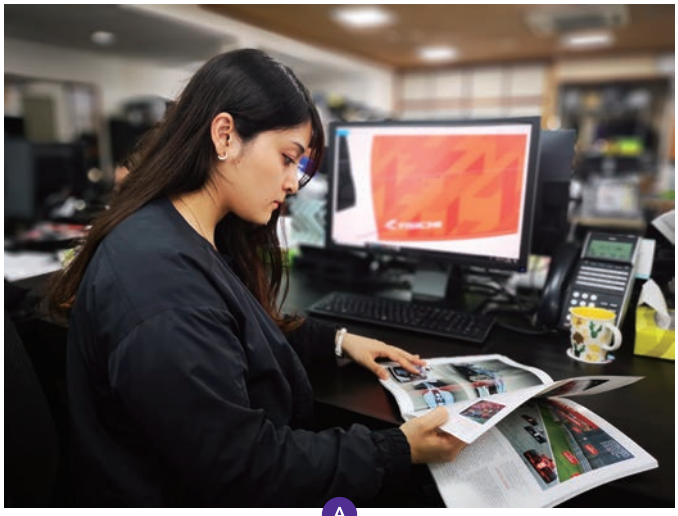
“ものづくり好きな仲間と過ごせた学生時代。寝不足続きでしたが、それはたとえようのない充実感”

モーターサイクル用品の企画開発・販売を行う、株式会社アールエスタイチに入社して6年。シャー ナディアザホールさんは企画部商品企画課の主任として、自社ブランドの企画提案、デザイン設計、生産管理に加え、最近ではシーズンごとのイメージビジュアル撮影やSNS、社内プロジェクトの運営など多岐にわたる業務を担っています。

「ファッション高度専門士科4年次の担任だった朴澤明子先生に、『バイクウェア制作のコラボやってみない?』と言われたことがきっかけです。ROARS ORIGINAL代表の高橋生児さん(7pで紹介)と、ヤマハ発動機販売株式会社とのコラボレーションでウェア制作と学内特別展示を実施する中で、"見た目だけでなく機能を設計する"モーターサイクルウェアに魅力を感じたんです。

そんな学生時代は日々の課題で睡眠不足(瀕死状態とも呼んでいました)、生活のため、もちろん制作物の材料費に充てるためのアルバイトも両立。節約の限りを尽くしていた中で、すみれ会奨学金の給付(2016年度、ファッション高度専門士科3年から4年進級時)が決まったときはうれしい気持ちと同時に、ほっとしたのを覚えています。離れて暮らしていた家族もとても喜んでくれて、ますますがんばろうと思わせてくれたのも奨学金のおかげです。

学生のやる気・熱意をくみ取り、尽力してくださる先生方に囲まれ、ものづくり好きな仲間と夜遅くまで作業した文化服装学院時代。今となっては味わえない貴重な経験として、心に刻まれています」







A. 現在勤めている、株式会社アールエスタイチの自分の席で、プロジェクトを練るシャーさん。下段はシャーさんがデザインした製品の一部。





B. インパクトのある学生時代の作品2点。



C. すみれ会奨学金は、ファッション高度専門士科の学生が心血をそそぐマイコレに必要な素材を海外へ仕入れに行く一助にも。
この写真は、その時副資材を調達したパキスタンのイスラマバードで撮影したもの。
表生地は生地問屋街のあるラワルピンディという街で手に入れた。





D. シャーさんのもう一つの故郷であるパキスタンに思いをはせたマイコレ。
右は全9体の作品を着用したモデルとの記念撮影。

個人アカウント
Instagram @nadia_shah32

株式会社アールエスタイチ
HP https://www.rs-taichi.com
Instagram @rstaichi.official

すみれ会奨学生の現在


A

世永 暦さん

(2018年ファッション高度専門士科卒業)

“固定概念にとらわれず、自由なものづくりの環境を素地に0からのデザインに取り組んでいます”

企業に勤めながら、個人的なデザインの仕事も両立している世永 暦さん。ファッション高度専門士科の授業で学んだ素材や染色の知識、グラフィックのスキルが今の仕事に生かされているようです。

「新卒で入社した会社で社交ダンスのウェアをデザインしていましたが、しばらくして、すでに存在する生地や柄を選んでデザインすることに物足りなさを感じるようになりました。

何もないところから柄をデザインすることに興味を持ったのがきっかけで、現在スカーフやテキスタイルのデザインを手がける会社に勤めつつ、個人的にもTシャツのグラフィックやスポーツウェアのデザインを手掛けています。

triactive(トライアクティブ)というトライアスロンチームのユニフォームデザインは個人的な仕事です。海外のレースでも日本をアピールできるようなデザインをリクエストされ、バックに富士山、フロントに伝統的な寺社とモダンで都会的な東京タワーなどをミックスしました。チームメンバーの田中慎一さんは、7月に行われたアイアンマン・スイスというレースにもこのユニフォームで参加されました!」

すみれ会奨学金により、思い描いたとおりのデザインと技術でマイコレを作り上げられたとのこと。妥協せずに作れたからこそ、その時のポートフォリオは新卒採用、転職活動の際にもしっかりと提示することができ、今のやりがいのある仕事に繋がっているようです。





B

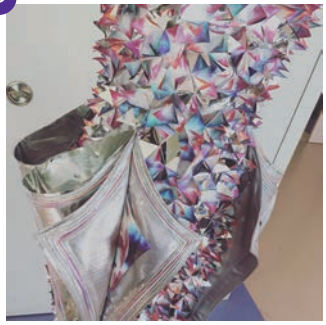



C




D





A. トルコのカッパドキアに旅行した際に。
B. 日本らしさと躍動感、カラーリングがマッチしたtriactiveのユニフォーム。
C. 妥協なしに制作できたというマイコレの一部。「Shangri-La 自分自身の桃源郷を求めて世界の果てまで旅をする」がテーマで、民族衣装や幻想的なバレエリュスをイメージソースに求めた。海外で手に入れた生地と自身で染色加工、手織りした素材を駆使している。
D. 学生時代に挑戦した文化服装学院ファッションコンテストでは、デザイン部門で佳作に入賞。緻密なデザインと作りに、現在の仕事の萌芽が見てとれる。

個人アカウント
Instagram @_ko_yo_mi_

釣部 怜子さん

(2018年ファッション高度専門士科卒業)

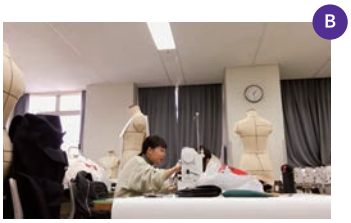
“素材の知識は文化服装学院の授業がベース。お客さまとも文化の話で盛り上がっています！”

大手テキスタイルメーカーで、アパレルブランドから問屋、個人のデザイナーまで幅広い顧客への生地の企画営業をしている釣部怜子さん。

「服、帽子、バッグといった小物、またカーテンなど、お客さまの要望に応じて、リスク(在庫のある)生地の販売を行っています。さまざまな加工を施すことに加え、番手、目付、混率などに気をつけながら、生地そのものからオリジナルの提案をすることもあります。こうして繊維メーカーで働いて5年になりますが、アパレル素材論などの授業で専門的な知識を得られたことはおおいに役立っています。グラフィックのスキルも同様です。よほど複雑な図案はプリント課に依頼しますが、自分でもできることは強みだと思っています。

学生時代は門限のある寮に暮らしていたこと、課題のこともあり、アルバイトをする余裕がありませんでした。金銭面では両親に甘えていましたが、すみれ会奨学金を得られたことで少しでも親の負担を減らせたことに感謝しています」

個人アカウント
Instagram @rou074241




A. 2021年に開催された展覧会「GUCCI Garden Archetypes」でのひとコマ。
B. 学生時代の写真。教室で課題に取り組んでいる釣部さんを友人が撮影。
C. 学院生はもちろん、教職員もテーマカラーで集まる「ドレスコード」イベント。この日は赤と白がテーマで、チームでコーディネートを競うコンテストにも挑戦した。左から3番目が釣部さん。
D. マイコレのポートフォリオより。フォルムの独自性、異素材の組み合わせをグレイッシュなトーンでまとめた独特の世界観が魅力。

浦元 森音さん

(2018年ファッション高度専門士科卒業)

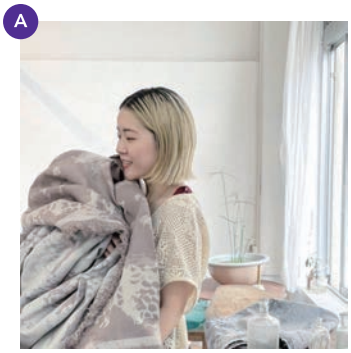
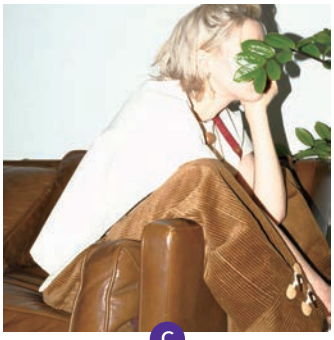
“ものにあふれた世の中でも手に取ってもらえるものづくりを目指して”

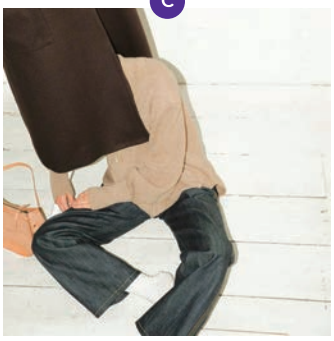
浦元森音さんはつい5ヵ月前に転職したばかりです。

「原料と小売りの間に存在する繊維商社で4年。いろいろな職種の方と仕事をした上で、自分がやりたいことは服づくりだ！とあらためて思い、株式会社トゥモローランドの企画・デザイナーに転職しました。シーズンに沿った色、素材、形を提案し、店頭に並ぶまで責任を持ってデザインすることが仕事です。価格帯・品ぞろえもカジュアルなブランドを担当していますが、その中でいかに付加価値を乗せ、手に取ってもらえるようにするかが挑戦です」

2017年度に受給されたすみれ会奨学金について尋ねると、「課題制作と自分の感性を磨くための投資(美術館巡りなど)に消えました」とのこと。多感な時期にさまざまなカルチャーに触れ、創造力のリミッターを外しておくことで、その人らしいものづくりの道が開けるのでしょう。ファッション高度専門士科の学びの集大成、マイコレにも浦元さんらしさがそこかしこに。そして、今の仕事にも通じる、デザインセンスが感じられます。

個人アカウント
Instagram @monenirom

A. 現在の浦元さん。
B. 卒業式での一枚。仕事の悩みを打ち明けたり、励まし合ったりと、同級生とは今でも繋がっているそう。左中央でピースしているのが浦元さん。
C. 展示方式で発表したマイコレの一部。木目をイメージした太うねのパンツ、鍵を金具に使用したコートなど、テーマ「育ってきた家」が素材やディテールによって表現されている。モデルの顔を見せていないのは、「集中して服を見てほしいから」とのこと。コンセプトと服、ビジュアルが絶妙なバランスを見せている。

長引く新型コロナウイルス感染症の影響で中止となったショーやイベントは数知れず。しかしながら十分な感染対策を講じ、またオンライン配信なども併用することで、最近では開催できるようになりました。学びの集大成である卒業制作ファッションショーも同様に、今の時代にできる最大限のことを模索することで、新たな表現方法を体得した在校生の現在地をご覧ください。

Shows, Events

**歴史を途切れさせない。そんな思いをつなぐ
ファッションショーやイベント**

文化祭Ⅰ部ファッションショー「HAKU」







新型コロナウイルス感染症のために、2020年度の文化祭は中止となり、一度その歴史は途切れたかのようでした。2021年度も紆余曲折はあったものの、学生・教職員が一致団結して開催を目指し、ファッションショーも含めてオンライン開催に至りました。Ⅰ部のショーテーマは「HAKU」。創作する、編むことを意味するハワイ語のhaku（ハク）、まっさらな状態から新たな歴史を刻んでいこうという象徴としての白、これまでの文化祭に携わった人のたましい＝魄（はく）、そして拍手の拍（はく）という4つの意味が込められました。全6シーン、計55体の作品が大ホールのランウェイを歩く姿を配信できたのは、今年1月31日になってからのこと。現在もショー動画やメイキングをご覧いただけますので、学生たちによる"文化の新しい文化祭"をお楽しみください。

文化祭Ⅱ部ファッションショー「Frustration」





Ⅱ部の学生にとっても、コロナ禍による作品発表の場が激減したことは大きなストレスを抱えることとなりました。その気持ちを「フラストレーション」と題して、映像作品とランウェイショーの二つのプロジェクトに結実させました。テーマに沿った作品を、個々の学生が約半年をかけて一から作り上げている点が見どころ。有志学生たちが自分の得意なことを生かして完成させた、ファッションへの思いを感じてください。

オンライン文化祭
特設サイト2021

卒業制作ファッションショー

コロナ禍での授業体制が続いた2021年度の卒業制作ファッションショーが、今年2月から3月にかけて無事開催されました。文化服装学院で学んだことが凝縮された作品をランウェイで発表する瞬間は学生にとってはもちろん、教職員にとっても感極まる瞬間。本年度の卒業制作ファッションショーにおいては、ファッション高度専門士科とロレアルプロフェッショナルチームとのコラボレーションが10周年を迎えたこともトピックとなりました。8体以上からなるプライベートコレクション（通称マイコレ）のコンセプトを実現するために欠かせないヘア&メークに、プロの力を借り、見る人をその世界観に没入させるほどのショーの数々が繰り広げられました。

また、ファッション流通専攻科の学生による卒業制作ファッションショー「CANVAS」も話題に。東京渋谷の宮下公園のオープンスペースを会場に、16もの在学生・若手卒業生ブランドのコレクションを一つにまとめるまで、各パートでの交渉なども学生が主体となり、実現に至りました。

いずれのショーも文化服装学院の公式YouTubeチャンネルにてご覧いただけます。







写真上は、ファッション高度専門士科の卒業制作ショーより。
下2枚はファッション流通専攻科の卒業制作ファッションショー。

RE・TENT

リテールプランニングコースの学生が、企画・運営・販売を手がけるショップ企画「RE・TENT」。2021年度は10月8日（金）～11月8日（月）にかけ、渋谷区内の4つの商業施設（渋谷マルイ、渋谷ヒカリエ、SHIBUYA109 渋谷店、ラフォーレ原宿）においてポップアップイベントを開催しました。イベント周知のためのSNSの活用、対面接客、販促プロモーションなどのノウハウを、リアル店舗の運営を通して体験。SDGsをテーマにしたSHIBUYA109 渋谷店のショップはビジネス情報番組の取材を受けるなど経済界からも注目され、文化服装学院の取り組みに高い評価がなされました。



渋谷ヒカリエのポップアップショップの様子。

学院生のリアルが見られる

在校生インタビュー動画「MAKE THE LEAP」はこちらから

文化服装学院では現在さまざまな動画を制作していますが、在校生に密着した動画連載「MAKE THE LEAP」では、ファッションに取り組む学生たちの素顔が見られます。なかには涙なくして見られない動画も！ MAKE THE LEAP＝飛躍するという意味のとおり、近い将来、この動画で夢を語ってくれた学生たちが活躍する姿が見られることでしょう。



YouTube
文化服装学院公式チャンネル

Contests

夢への一歩。
国内外のコンテストで相次ぐ受賞！

※在籍科・学年は受賞時となります

文化服装学院ファッションコンテスト 2021

公開審査会の模様、また石川泰生さんのインタビュー動画は、YouTube文化服装学院公式チャンネルでご覧いただけます。
文化服装学院YouTube公式チャンネル





石川 泰生さんと受賞作品。

[デザイン部門]

メンズ、レディスを問わず、次世代を担うデザイナーを発掘することを目的とし、創造性、革新性、完成度を基準として審査されます。デザイン画による応募総数1,859点のうち、一次審査を通過したのは21点。2021年12月9日（木）のショー形式による最終審査会で受賞者が決定されました。石川泰生さんは2年連続のデザイン大賞を獲得という快挙。名前が呼ばれた瞬間は、会場が万雷の拍手と歓声に包まれました。

【デザイン大賞】石川 泰生さん（ファッション高度専門士科4年）
【優秀賞】ジャオ サンドラ リズ ナクアさん（服飾専攻科 デザイン専攻）
【秀作賞】ジョウ エンさん（服飾専攻科 デザイン専攻）
【佳作】髙橋 知優さん（アパレルデザイン科2年）
【佳作】小山 創大さん（愛知文化服装専門学校 アパレル科2年）

[技術部門トワリスト]

技術とクリエーションを競うコンテスト。課題デザイン画を基に、バックスタイルは自由に制作するのが同部門の特徴であり、トワリストとしての腕の見せどころの一つとなっています。2021年12月7日（火）に公開審査会が行われ、特にスカート部分の軽やかな仕上がりが高い評価を得た作品がトワリスト大賞を受賞しました。



山本 太一さんと受賞作品。

【トワリスト大賞】山本 太一さん（服飾専攻科 技術専攻）
【佳作】チン ショヨさん（服飾専攻科 技術専攻）
【佳作】杉森 由梨さん（服飾専攻科 技術専攻）
課題デザイン画作者 岩元 彩華さん（ファッション高度専門士科4年）

[服飾工芸部門]

バッグ、シューズ、帽子、アクセサリー、テキスタイル各分野の優秀なデザイナーを発掘することを目的としており、創造性、革新性、機能性、完成度を基準とし審査される部門です。応募総数290点のうち、最終審査に進んだ10点から、受賞者が決定されました。



柏原 由似さんと受賞作品。

【服飾工芸大賞】柏原 由似さん（ジュエリーデザイン科2年）
【佳作】タン ユインジュウさん（ファッションテキスタイル科1年）
【佳作】西野 陽光さん（ジュエリーデザイン科1年）

装苑賞

1956年に創設され、新人デザイナー発掘の先駆けとして現在も広く知られる装苑賞も今年で96回目を迎えました。一次審査のポートフォリオ審査で32組を選出し、対談形式の2次審査を通過した16組が今年6月21日（火）の公開審査に挑みました。惜しくも学院生は装苑賞は逃しましたが、佳作1位に山口空叶夢さん（アパレルデザイン科3年）、審査員特別賞に高山 光さん（Ⅱ部服装科2年）がそれぞれ輝きました。

また特別ゲストとして小池百合子東京都知事が登壇。現在のファッションのあり方について、また近く始動する東京都主催のファッションコンテストについて学院生とともにトークセッションを繰り広げました。

▲ 装苑賞特設サイト

▲ 第96回装苑賞公開審査会



佳作1位を受賞した山口さんと「BUGS」をテーマとする作品。虫の生命力がもつ美しさをつぶさに観察し、そのフォルムとともにニードルパンチや手彩色により、躍動する美を表現したことが評価された。



審査を終え、急遽設けられた審査員特別賞を受賞した高山さん。自ら制作した手すきの紙を一部用いて、儚さ、透明感、偶発性など紙の特性を生かした作品は、繊細ながらも完成度の高さで審査員をうならせた。

YKKファスニングアワード





服づくりにおいては副資材と呼ばれる、ファスナーやバックル、スナップ、ボタンといった"小さなパーツ"の可能性を探る「YKKファスニングアワード」でも学院生の活躍が見られました。7,879点もの応募作品の中から最終（2次）選考を経て、2021年11月30日（火）にファッションショー映像で披露されたのは30点。アパレル部門、ファッショングッズ部門で計4名が各賞に輝きました。

アパレル部門
[YKK特別賞] 石川 泰生さん（ファッション高度専門士科4年）、写真上左

ファッショングッズ部門
[グランプリ] テイ シンフさん（バッグデザイン科2年） 写真上右
[優秀賞] 金山 大智さん（シューズデザイン科 3年） 写真下左
[審査員特別賞] 中島 萌さん（帽子・ジュエリーデザイン科3年） 写真下右





YKK
ファスニングアワード
特設サイト
▼

FBアワードY2022

今年、ファッションビジネス学会が学生の育成支援を目的として初めて開催したファッションビジネス企画コンテスト「FBアワードY2022」において、ファッションプロモーションコースの関根 凛チーム（小川優里さん、西田海聖さん、関根凛さん、廣川達也さん、福澤佳奈さん）が見事グランプリを受賞しました。同アワードには84チーム（302名）、個人170名、計472名が応募。「時代を捉えた新たな隙間を狙ったニューニッチビジネス」というコンセプトのもと、関根 凛チームが発表したのは、「ファッション業界・古着業界・リペア業界・喫茶業界」の4つの問題を解決するプロジェクト。ファッションマーケティング概論の授業での取り組み、また昼休みも準備に余念がなかったという、その情熱が実を結びました。





FBアワードY2022
リポート ▶

ロロ・ピアーナ ニットデザインアワード

極めて貴重な最高級素材を提供する服地メーカーとして、またハイエンドなレディ・トゥ・ウエアやグッズを展開するロロ・ピアーナが、才能ある若手デザイナー発掘のために創設した「ロロ・ピアーナ ニットデザインアワード」。世界7カ国のファッションスクールに選出された後、「Rediscovery（再発見）」をテーマとしたデザインコンペティションに参加した橋本 菫さんとチョ ウォンビンさん（共にニットデザイン科3年）のチームが、2位を受賞しました。2022年6月21日（火）にイタリアで開催された最終審査には、リモートで参加。「TABI（旅・足袋）」をテーマに、同ブランドのアイコニックなアイテムの一つであるトラベラーズジャケットを再解釈。技術とクオリティが高く評価されました。





ロロ・ピアーナ ニットデザインアワード（英語）▶

インフォメーション

Information

会計報告

2021年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大のため、すみれ会総会が中止となりました。そのため会計報告は監査委員による監査を経て役員に報告がなされ、承認されました。2022年度予算案とともにここに掲載し、会員の皆様にご報告いたします。

2021年度　収支報告

期間：2021年4月1日～2022年3月31日

収入　（円）

項目	予算	決算
会費収入	10,660,000	10,677,000
事業収入	ー	ー
雑収入		765
寄付金収入		532,000
収入合計	10,660,000	11,209,765

支出　（円）

項目	予算	決算
会員証発行費	300,000	42,537
会報発行費	2,500,000	2,108,894
事業支出費	3,000,000	560,030
事務運営費	500,000	53,458
会議費	280,000	46,924
出張交通費	100,000	0
渉外費	0	0
報酬	0	563,341
慶弔費	200,000	166,650
奨学金	1,550,000	1,400,000
会費返金		100,000
雑費	5,000	1,870
予備費	2,225,000	0
支出合計	10,660,000	5,043,704
前期迄繰越剰余金		90,425,391
当期剰余金		6,166,061
次期繰越金		96,591,452

2022年度　予算案

期間：2022年4月1日～2023年3月31日

収入　（円）

項目	予算
会費収入	14,160,000
事業収入	0
合計	14,160,000

支出　（円）

項目	予算
会員証発行費	300,000
会報発行費	2,500,000
事業支出費	2,500,000
事務運営費	500,000
会議費	280,000
出張交通費	50,000
慶弔費	200,000
雑費	5,000
奨学金	2,100,000
予備費	5,725,000
合計	14,160,000

会員手続きについて

永久会員への更新、会員証の再発行、氏名・住所等の変更手続きは、文化服装学院すみれ会ウェブサイト、または文化服装学院事務局窓口にて承ります。

文化服装学院すみれ会ウェブサイト

https://sumirekai.bunka-fc.ac.jp

▶永久会員／会員証再発行／氏名・住所変更の手続き方法

①『会員特典・手続き』→『会員手続き』申し込みフォームに必要事項をご記入ください。
②永久会員への切り替え、会員証再発行の場合は、お申込み時に記載いただいたメールアドレス宛てに、会員証発行費のお支払先をご案内いたします。
③会員証発行費のお支払いが確認でき次第、ご登録の住所に会員証を郵送いたします。

▶すみれ会Web会員登録のお願い

Web会員へは無料でご登録いただけます。Web会員の皆さまには、ご登録いただいたメールアドレス宛に同窓会や文化祭などのイベント情報をお届けいたします。現在会員の皆さまも、ぜひWeb会員へご登録をお願いいたします。なお、Web会員のみでのご登録の場合は、会員特典が限定されますことをご了承ください。

▶Web会員登録方法

『会員特典・手続き』→『会員手続き』申込フォームの「Web会員申込み」にチェックを入れて必要事項をご記入ください。

▶会員手続き、会員特典に関する問合せ先

文化服装学院すみれ会事務局
〒151-8522 東京都渋谷区代々木3-22-1　TEL：03-3299-2073
受付時間：9：00-17：00

すみれ会会員特典

すみれ会では、会員特典をご用意しております。ご利用にあたっては「すみれ会会員証」をご提示ください。※特典情報は随時更新しております。最新情報はホームページでご覧ください。

特典① すみれ会報、ご案内の発送

同窓会誌「すみれ会報」を年に1回、お送りいたします。

特典② 文化学園施設利用

文化学園図書館

ファッションに関する書籍、雑誌の所蔵では日本一ともいわれる文化学園図書館。稀覯本から、トレンド予測情報誌、デザイナー作品集、雑誌ほかその数34万冊以上。開館スケジュールについては、文化学園図書館ホームページ掲載の「図書館カレンダー（卒業生用）」をご確認ください。
https://lib.bunka.ac.jp/
TEL：03-3299-2395

文化学園服飾博物館

「"衣"を通して日本と世界の文化を知る」をテーマとして、年4回程度の企画展を開催。世界各地から収集された貴重な衣服や染織品、デザイナーの作品などによる展覧会が、無料にて鑑賞いただけます。
https://museum.bunka.ac.jp/
TEL：03-3299-2387

文化学園ファッションリソースセンター

布地に関する実物資料と情報を提供するテキスタイル資料室、コレクション動画やアカデミー賞受賞作品をはじめとする2400本以上の名作映画等を所蔵している映像資料室がご利用いただけます。
https://www.bunka.ac.jp/frc/

特典③ 文化学園事業利用の優待

文化購買事業部

GAKUEN SHOP 表生地・手芸用品コーナー・書籍コーナーの商品を10％OFFでご購入いただけます。※一部対象外がございます。
https://shop.bunka.ac.jp/
TEL：03-3299-2034

文化出版局

雑誌「装苑」「ミセスのスタイルブック」の定期購買を10％OFFにてお申込みいただけます。下記ホームページまたはお電話よりお申込みください。
▼特別割引購読の申込
（株）富士山マガジンサービス
https://www.fujisan.co.jp/campaign/bunka/
フリーダイヤル：0120-223-223
オペレーターに「クーポンコード：sumire2022」をお伝えください。
※クーポンコードの提示がないと特別割引は適用されません。

文化服装学院生涯学習

文化服装学院の充実した施設と設備を利用しながら学べる、90以上のオープンカレッジと通信教育講座。ブラッシュアップにも役立つBUNKAファッション・オープンカレッジの入会金を、半額にてお申込みいただけます。
https://lifelong.bunka-fc.ac.jp/
TEL：03-3299-2233

いいやま北竜温泉 文化北竜館

ハート型の湖、北竜湖に隣接する北竜館は、北信州の四季を感じられるやすらぎと癒しの空間。ゆったりとした会議室もあり、企業の写真研修やセミナーにもご利用ください。夕食時のドリンクが無料サービスとなります。
〒389-2322 長野県飯山市大字瑞穂 7332-2
http://www.bunkahokuryukan.com/
TEL：0269-65-3121

文化軽井沢山荘

軽井沢ショッピングモールにも近い文化軽井沢山荘。おとぎ話に出てきそうなユニークなデザインのレストランは、晴れた日には浅間山を一望できる自慢の施設です。
〒389-0113 長野県北佐久郡軽井沢町レイクニュータウン
https://www.bunkakaruizawasansou.com/
TEL：0267-48-1525

特典④ 協力企業によるサービス

日本旅行

日本旅行の全国支店店頭にて申し込みされると、パッケージツアーを5％OFFにてご利用いただけます。窓口にて、すみれ会会員証をご提示ください。
（Web、電話でのお申込みは対象外）

国内：赤い風船
海外：マッハ、ベスト
※他社企画、Webコレクション等、上記ブランド以外は対象外です。
※旧日本旅行OMCトラベルは除外となります。
※本人とそのご家族が対象です。
※その他各種割引との重複利用はできません。

会員特典にご協力いただける企業、お店を募集しています。

会員証の提示で割引が可能になる、特典をつけてくださるなど、卒業生の皆さまのご好意をお待ちしております。

問合せ先：すみれ会事務局　TEL：03-3299-2073

文化服装学院 創立100周年記念事業のご案内

100th
BUNKA GAKUEN

世界で活躍するクリエーターを数多く輩出してきた文化服装学院は、2023年に100周年を迎えます。それを記念し、一年を通して各種イベントを予定しています。

特に過去の文化祭Ⅰ部ファッションショー作品のアーカイブショーには、現役で活躍する卒業生が参画。スタイリングや演出・モデルなどの各パートで、在校生と共に再構築を行い、2023年6月23日（金）前後に同ショーを開催予定です。

会員の皆さまには6月24日（土）に同ファッションショー観覧と同窓会パーティにご参加いただけるよう準備を進めておりますので、ぜひご予定ください。

※各種イベントの日程、内容等は文化服装学院公式ホームページ、すみれ会公式ホームページ等でも随時発表いたします。
※イベントは一部内容変更、または中止となる場合がございます。

文化服装学院 教員採用情報



文化服装学院では、未来のファッション業界を担う人材を育成する教員を募集しています。授業や学校生活をはじめ、学生を全面的にバックアップするクラス担任制が特徴で、学生と共に歩み、喜び、成長できる職場です。

[募集概要]
常勤助手
■募集人数：若干名
■就任時期：2023年4月1日
■応募資格：学校が定める学歴条件を満たす者
※詳細は「文化服装学院Webサイト 教員採用情報（助手）」を参照ください。
■応募方法
まずはメールでお問い合わせください。
折り返し詳細をご連絡いたします。
■選考プロセス
書類選考→筆記（実技）試験→
グループディスカッション・面接→内定（予定）
■応募書類提出締切
2023年1月5日（木）
■問合せ先
文化服装学院 事務局 教務部 教務一課 髙久／飯島
TEL：03-3299-2250 ／ 2298
メールアドレス gakuin-saiyou@bunka.ac.jp

※休校日や夏季・冬季休暇中はお問合せに返信できかねます。ご了承ください。
※応募資格に該当しない方は担当までお問い合わせください。
※応募書類提出は郵送必着
※配属先については本学院にて決定

BUNKA
古本募金

不要になった書籍・CD・DVD・ゲームソフトを指定の古本業者に送付すると、その売却代金が文化学園への寄付金となる取り組みです。2023年に、創立100周年を迎える文化学園のさらなる教育・研究の充実のために、ぜひご協力をお願いいたします。詳細は右のQRコードから専用ホームページをご覧ください。



役員紹介



すみれ会会長
佐藤繊維株式会社
代表取締役
佐藤 正樹 氏



すみれ会名誉会長
文化服装学院　学院長
相原 幸子 氏



すみれ会副会長
株式会社オールファッションアート
研究所　代表取締役
松本 ルキ 氏



すみれ会副会長
株式会社LEWS纏(リューズテン)
代表取締役
堀畑 裕之 氏



すみれ会副会長
元文化服装学院教授
元学院長補佐
工藤 勝江 氏



すみれ会副会長
文化学園　顧問
日本ファッション教育振興協会　常務理事
野中 慶子 氏



スーパーバイザー
株式会社サーヴォ
花里 裕 氏

SUMIRE KAI 2022 | NO 62

第62号(2022年号)　2022年10月1日発行
発行人＝佐藤正樹
編集者＝すみれ会広報活動専門委員会
発行所＝文化服装学院すみれ会
〒151-8522　東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL:03-3299-2073
Art Direction & Design：中井 拓(QUEEL DESIGN)
アパレルマーチャンダイジング科卒業



SUMIRE KAI